

タイで行ってきた複言語・ 複文化ワークショップ実践の 変化を考える

—親と子と教師、そして運営者が集う
「場」の学び合いを踏まえて—

深澤 伸子

要 旨

筆者はモノリンガルの価値観から脱却することを目指し2011年からタイでワークショップを実施してきた。このワークショップ実践の13年の歴史の中で、様々なツールを開発し、対象者も親と子どもと教師の3者へと変化し、2021年のオンライン活動からは、親子・教師や運営者を対象としたものへと実践対象を拡張してきた。本報告では13年間にわたる複言語・複文化ワークショップ実践の意義を変化の視点で振り返り、これらの実践の変化が対話によって起きていたことを述べる。

キーワード

複言語・複文化 ワークショップ 対話 変化 自己開示 地域性

1. タイの複言語・複文化ワークショップ実践

1.1 実践の概要

筆者は2006年に、「タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会」(Japanese Mother Tongue and Heritage Language Education and Research Association of Thailand) (略称JMHERAT) を立ち上げ、複言語・複文化ワークショップ(以下WS)を実施してきた。このWSのためにJMHERATでは①言語マップ、②関係性マップ、の2つツールを開発し、③言語ポートレートはその使用方法を開発してきた。それぞれについては深澤・館岡(2018)、深澤・池上(2018)を参照されたい。WSでは、これらのツールを用いて自らの中の移動に伴う複数性や周囲との関係性の中で起こった言語使用の履歴を可視化し、可視化によって相対化された語りを共有した。この語りとWS感想で、WSを通じ複言語・複文化という新たな視点で自分を捉えなおしたことが確認された。

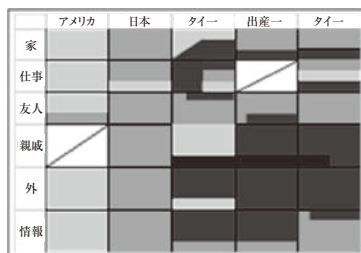


図1 言語マップ例

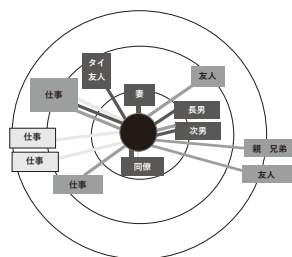


図2 関係性マップ例

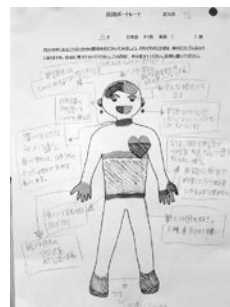


図3 言語ポートレート例

言語マップは複言語人生の「過程」を描き、関係性マップは「今」あるいは過去のどこかの時点で、自分が、誰とどんな言語でどのくらい関わっていたのかを描く。そして、言語ポートレートは、「今」の、自分と言語との関係、そして自分の複数の文化接触による影響が描かれる。

1.2 実践の展開

これまでのWSは表1の通りである。回数があるのは、参加者を公募したWSである。この表から、ツール、活動内容、対象者、対象地域が少しずつ変化してきたことがわかる。

表1 ワークショップ一覧

	WSの種類	時期	内容	対象
1	第1回WS	2011年8月	言語マップ	親、教師
2	第2回WS	2012年8月	違和感をめぐるドラマ	親、教師
3	第3回WS	2015年8月	関係性マップ	親、教師
4	勉強会	2016年1月	関係性マップ	親、教師
5	大学生会	2016年4月	言語マップ	日本語を学ぶ大学生
6	第4回WS	2017年9月	言語マップと言語ポートレート	親、教師、子ども
7	子ども会	2017年12月	言語マップと言語ポートレート	子ども
8	第5回WS	2018年8月	言語マップと関係性マップ	親、教師、子ども
9	大学生会	2019年1月	言語マップとポスター作成	日本語を学ぶ大学生
10	大学生会	2019年2月	言語ポートレート	日本語を学ぶ大学生
11	第6回WS	2019年8月	HL「複言語・複文化を生きる当事者の語りを聞く」	親、教師、子ども
12	第7回WS	2020年8月	HL「複言語・複文化を生きる当事者の語りを聞く」★オンライン	親、教師、子ども (8カ国)
13	第8回WS	2021年8月	言語ポートレート ★オンライン親子ワークショップ	親子(12家族28人 子ども6歳~17歳、4カ国)
14	第9回WS	2022年8月~10月(全4回) ★オンライン運営者向けワークショップ		運営者(13カ国)
15	第10回WS	2022年8月	言語マップと関係性マップ	親、教師、子ども(9歳~15歳)

※HL (Human Library)

2. 変化の概要

これまでのWSの変化の詳細については深澤・館岡（2018）、深澤・池上（2018）、館岡・深澤（2020）を参照いただきたいが、2.1に簡単にまとめる。また、2020年以降のオンラインによる変化は2.2に概要をまとめる。

2.1 これまでの変化—ツール、対象、活動内容について

2.1.1 ツールの変化

言語マップは自己の複言語・複文化人生を時間軸で可視化するものである。親は自分のマップを描き、子どものマップも描いてみることで、「自分の価値観と子どもの価値観をどう埋めていけばいいか考えるきっかけになった。」（親）と、子どもと自分の経験の違いを認識できた。だが、このマップでは誰とどんな言語活動が行なわれているかは不明だった。そこで関係性マップが開発された。このマップは関係性の中でのことばの使用と、ことばと人との愛着の関係を親や教師たちに注目させ「子どもにとって話したいと思う相手の存在が大切なのだ」（親）と、子どものことばの成長を関係性の視点で意識できるツールになった。しかしこの2つのツールだけでは文化意識までは表現しきれなかった。そこで言語ポートレートを導入した。子どもたちは自分の中の複数のことばの存在を「絵の具が混ざっているよう」「色で分けたくない」と表現し、ことばと文化が混ざり合っその人を構成している子どもたちの複言語・複文化の現実を、大人たちに「胸にすんと落ちた」（親）と、理解させた。

2.1.2 対象者の変化

親を中心に年少者教育に関わる教師たちを対象に始めたが、外国語として実施されている日本語教育でも複言語・複文化の視点は重要であると考え、2回目以降は日本語教育に関わる教師も対象にした。教師たちからは「自分もまた複言語・複文化を生きる者であることが意識できた。」と感想があり、学生をWSに誘う動きが出て来た。そこで、教師たちが学生たちに声をかけて行ったのが大学生会である。初回のWSで休憩も取らずに自分の複言語・複文化人生を語る学生たちの姿に、当事者の子どもが語る場の必要さを強く感じ、中学生、高校生もまじえた子ども会など、子どもたちだけを対象にしたWSを実施することにした。

2.1.3 活動内容の変化

互いの語りから学ぶものは多い。もっと語りに耳を傾けたいと考え実施したのがHLの枠組みを借りた「複言語・複文化を生きる当事者の語りを聞く」WSである。大人3人、子ども4人が語り手になり、翌年もほぼ同じメンバーで実施した。WSまでに語り手とファシリテーターが対話を重ね、意識していなかった経験や思いが堀りおこされ、自身による新たな体験の意味づけが起きていた。その実践を行った2019年のWSは、館岡・深澤（2020）に詳しい。

ドラマワークショップは文化体験に焦点を当て「違和感」を表現する試みを行ったWSであった。ただ、ドラマという手法がJMHERATとして深められず継続はできなかった。このWSに関しては深澤・館岡（2018）を参照いただきたい。

2.2 オンラインによる変化—対象地域と対象者の拡大

2020年のコロナ禍で活動はオンラインになり、対象者の居住地域は世界規模になったが、それだけではなくこれまでタイという一地域で対面でやっていたWSの手法が大きく問われることになった。以下、具体的に運営者にどんな変化をもたらせたか述べる。

2.2.1 ツール活動がもつ自己開示性の再認識

最初のオンラインWSはH Lの枠組みを借りたWSである。WSでは参加者が匿名の聴き手に終わらないように、対面と同様、参加者にも言語マップを描いてもらい、経験を共有することから始めた。しかし、自己開示をめぐる参加者から「辛かった」などの感想があり、ナラティブ研究者からもツール活動の自己開示性への配慮を問う投稿があった。この経験はWSの自己開示性を改めて意識し、実践方法を見直すものになった。

2.2.2 ローカルからインターローカルへ

上記の経験から、JMHEARTは、オンライン活動におけるツール活動の在り方を振り返り議論した。また、運営者自身の「地域」性も振り返った。これまで行っていたWSは、タイという環境や事情と深く関わるものであった。自己開示性についても、タイという地域の背景が共通しているゆえに描かずともよいもの、描いても抵抗のないものなどを私たちは無意識に共有していたということがあるだろう。

オンライン活動はこれまでのJMHEARTのWS実践が、外から批判を受けた初めての経験であったが、批判は対話の始まりでもあり、新たな知見を得る機会でもあった。この経験は新たな課題の誕生を生み実践を変えた。

3. 議論を生かした新たな活動へ

3.1 様々な地域で生きる家族をつなげる親子WS

自己開示性を意識したことで、語る者と語らせる者にならないWSのデザインとファシリテーターの役割が議論され、翌年2021年には、初めての親子を単位とした実践を行った。親子を対象としたのは、オンラインによるWSでは、家族単位の参加と地域性を越えた活動ができ、前年の議論を生かせると考えたからである。世界の親子を単位として何が見えるか興味があった。実施に際しては、それぞれの親子の事前情報に合わせ、ファシリテーター担当者が対話を重ね、オンラインWSの場をデザインした。このWSでは親と子がそれぞれに抱いていた言語・文化意識がずれていたことが明らかになり、親と子のそれぞれの言語・文化意識を、互いに理解し合うことができた。

3.2 運営者向けWS

2020年の経験から、もっと外部の実践者との対話をする必要を感じた。そこで、世界の子ども日本語教育実践に関わる実践運営者を対象としたWSを行うことにした。各地の実践者にJMHERATのツールを体験してもらい、最終的に自分の実践の場に文脈化してもらうWSである。目指したのは各地の実践者との対話によりJMHERATで開発してきたツールを見直し、様々な場での実践化の可能性を探ること、そして私たちJMHERATが参加者との対話によって、複言語・複文化主義を目指す能力とは何か考察を深めることで

あった。このWSは2022年8月21日から10月9日までの4回連続で開催した。

このWS開催にあたっては、筆者のほか、この活動の実践化に興味をもった、館岡洋子氏、三輪聖氏と、JMHERATの有志4名で企画委員会を立ち上げ、WS前年の2021年11月から対話を開始し、実践の目的と内容を議論した。実践の流れとしては、3つのツールを体験し、この体験を個人として、また運営者としての2つの視点で振り返り、その振り返りを参加者同士で共有しながら、不明な点を次のWSの議論点にし、最終的には自分の実践の場へ文脈化することを目指した。

いかに対話を起こすかを目指したWSであったが、4回のやり取りでは対話を議論にまで進めるのはなかなかむずかしかった。そこで、このWS終了後さらなる対話の機会を設定した。それが次に報告する実践共有会である。なお、運営者向けWSに関しては稿を改め報告したい。

3.3 実践共有会—運営者向けWSから生まれた活動

参加者は運営者向けWSに参加した人達である。フランスと日本で実践を予定している人2名、ベルギー、フランスから1名ずつ、企画メンバーの館岡、三輪、深澤、ほかにJMHEARTから3名、計10名がこの会への参加を希望した。2022年12月から翌3月まで4回対話を重ね、フランスと日本の実践者が3月のセミナーで発表した。現在は2回目共有会を実施し、成果は2024年3月のセミナーで発表する予定である。

4. まとめ

本稿は実践内容の変化に注目してWS実践を振り返ったものである。複言語・複文化WSは親と子と教師、それぞれの学びから、自分の言語・文化意識を変えてきた。そして、運営実践者であるJMHERATの意識も変え、WSの変化を生んだ。今回新しく報告した変化は、さらにそこに他地域、多様な実践者が加わったWS実践の変化である。この変化はJMHERATが参加者と対話をする中で生まれていた。そして、対話は2.1、2.2で述べたようにJMHERATの内部のものと外部の参加者、双方の間で起こり、重なり合い、影響し合っていた。そこには個人と個人、実践の場と実践の場といった、個別の実践が幾重にも重なり、行き交うことで生まれた対話があった。

JMHEARTのWS実践の変化とは、幾重にも実践が重なり、その都度の振り返りによって生まれた対話によって起こっていた。これからも、実践の振り返りと対話を重ねながら、WS実践を継続し、更新させ成長していく、それがJMHEARTの今後も続く課題である。

参考文献

- 館岡洋子・深澤伸子（2020）「複言語人生を語ること、聞くこと—JMHERAT複言語・複文化ワークショップから—」『早稲田日本語教育学』28、pp.89-99
- 深澤伸子・池上摩希子（2018）「タイにおける複言語・複文化ワークショップの実践—『自分を語り他者と体験を共有する場』を作り、繋げていく意義—」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—』9、pp.1-18

深澤伸子・館岡洋子（2018）『『私が私に向かう自己表現活動』—タイにおける複言語・複文化ワークショップ—』石黒広昭編『街に出る劇場—社会的包括活動としての演劇と教育—』新曜社、pp.91-104

（ふかざわ しんこ JMHERAT（タイにおける母語・
継承語としての日本語教育研究会））